

# めんたるねっと

VOL.18-1

No. 69

総会・研修報告	地域でできる予防の取り組み～子どもと若者支援から考える～	2
若者支援の現場から	認定NPO法人多文化共生教育ネットワーク(ME-Net)の取り組み	5
地域の現場から	アート制作を活動の柱にした就労継続B型事業所「道工房」	8
被災地より	立つ鳥、後を濁さないための5年間／第2期がスタート	10
活動報告	駄菓子屋カフェ Irodori／地域の小学生や保護者と交流	11
	ジョブコーチ／プレジョブスクール／Irodori	12
	事務局より／予定・報告	14



絵：八木陽子

## 地域でできる予防の取り組み

### ～子どもと若者支援から考える～

東海大学健康学部健康マネジメント学科 准教授

横浜メンタルサービスネットワーク副理事長 舩松克代

#### はじめに

この1年余り、私たちの生活は変化を余儀なくされ、子どもから高齢者まで不安と混乱の中に置かれています。特に子どもと若者の状況を顧みると「家庭内の両親の不和に挟まれる子ども」「親と顔を合わせる時間の増加で息苦しさを感ずる若者」「友達がますますできず、ネットなどで知り合った人との関係にのめりこむ若者」など、私のところにも様々なコンサルテーションが寄せられます。

#### 1. 支援の入り口はどこ？

皆さんは、子どもや若者支援をしようとする時にどんなところからコミットしようとするのでしょうか？私はまず問題に着手する前に、その方々がどんな状況に置かれているか、マズローの欲求5段階説を頭に置きながらアセスメントすることを行っています。(図1)とかく支援をしようとする人は、問題から入っていきこうとします。どの対象者でも同じですが、それは見ず知らずの人が人の心に土足で入っていくようなものです。

まずは、対象者のどの欲求が満たされているかスタート地点を考えてみましょう。

#### 2. 横浜メンタルサービスネットワークの事業の発展とともに

2001年に設立されたYMSNもハタチになりました。人間でいえば成人式です。NPOとしての真価が問われるのはこれからの活動であると思っています。精神障がい者の就労支援活動から始まった法人でした。就労をして継続している人たちのジョブコーチをしていると、仕事はできても、休み時間や職場外での親和

的コミュニケーションが不得手でストレスを感じる人たちが多いことがわかります。彼らの生活史を紐解くと中学、高校あたりから学校に行けなくなり、友だちといつまでも話が終わらない、学校帰りに買い食いしながらしゃべる、修学旅行に行くなど、様々な体験をしていないことがわかります。こういう経験の乏しさが社会に出た後、困難さに結び付くのだと私たちは身につまされました。そこで就労継続者のためのグループを立ち上げたり、女子会、男子会などを始めました。

#### ① 中高生からのキャリア教育

つまずき始める中高生あたりからの関わりを持っていかないと考えるようになりました。明治安田生命こころの健康財団からの研究助成を得て、自閉症スペクトラム傾向がある中高生のためのキャリア教育プログラムの開発をすることにしました。夏休みの期間を使って、「グロウ」と名付けたスキルトレーニング、大学や専門学校の見学、職場体験などの体験型のプログラムを考え実施、効果判定をしました。このプログラムの実施の中からわかってきたことは、定時制高校や

図1

#### マズローの「欲求5段階説」



通信制高校の中では、教員が懸命に支えている学生、家庭があること。制度につながるかつながらないかのぎりぎりの瀬戸際にある学生たち。困難性を抱えてい

るけれども、公的支援という形にはつながらない、つながりたくない事例があるということでした。

必要なのは、単一な支援よりも多くの関わり、多くの居場所で、社会で生きていく力を育てる学びの場の必要性を感じました。

## ② 若者の職場準備スクール「プレジョブ」から親子コミュニケーション支援のため SST へ

神奈川ボランティア基金 21 に採択されて、生きていく力を育てる学びの場としてプレジョブを始めました。そこに集う若者たちは、中学高校よりもっと前より生きづらさを抱えていること、家庭においても育てにくさを感じているにも関わらず、どこにも相談につながらず青年期を迎えているご家族が多いことも見えてきました。ということからもっと早くに予防活動をする必要があるのではと考えるようになりました。

### 若者の職業準備スクール プレジョブ をやる中で見えてきたこと



- ・生きづらさや家族の育てにくさは、最近始まったことではなくかなり長きにわたって抱えている問題である
- ・問題化する前に早期にかかわる手立てはないのだろうか？
- ・そもそも家族や親子といった関係が健康であれば、子供たちの育ちの場になれるのでは？

### 親子の向き合い方に介入できないか？

そこで、障がいの有無にかかわらず、親子がもっと向き合うスキルを育てられないかと田園調布学園大学研究助成金を得て、「親子コミュニケーション支援コミュニティ」を始めました。親子が同じコミュニケーションスキルを学ぶ、それが家庭内での相互作用による影響を与えることを期待しました。プログラム自体は、子どもたちの学校でのスキルの向上や親の怒りのコントロールに効果があり、参加者からも自分たちばかりでなくパパやママもやる企画が良かったと好評でした。しかし参加者を集めるのに難渋しました。お声掛けをした福祉や現場は問題には対処するが、予防という観点はないこと、トレーニングという形であると、多くの家族をターゲットにしにくい（そもそも問題意識があるご家庭が多く集まる）。実際集まった問

題意識を持っているご家庭の方はポテンシャルが高い。問題意識を持っていないまたは問題が顕在化していない親子や家庭への介入こそが、実は必要なのは？と考えるに至りました。

## ③ 森林セラピーを親子の心身の健康予防活動へ

予防活動が展開できるツールや場がないか？悩んでいる時、友人に誘われて私たち親子が森林セラピーに参加しました。そこで感じた母としての安堵感、息子が発した「森に来るとママ怒らないね～」という言葉が私の中で化学反応を起こし、森林セラピーは親子心身健康予防のツールとして使える！と思ったのです。そこで都内の公園でトライアル試行をし、2020年に子どもゆめ基金の助成金を得て、親子で感じる森林セラピー@はだの表丹沢森林セラピー基地を実施しました。神奈川県、東京都の児童館、秦野市の市民に呼びかけ、11組の親子が参加してくださいました。

日帰りのプログラムで、午前は親子別々に森林セラピーを体験し。午後は親子で一緒に森でのアクティビティを行いました。いろいろなご家族が集まりました。とにかくリラックス体験をしてもらうことを主眼としましたが、その中から見えてきたこともあります。いつもの親子関係が再現されたり、ちょっと家庭の様子が垣間見られるシーンが度々ありました。もちろん今回は直接援助をする場ではないので、介入したりはしません。予防活動は最後に皆が良い表情で帰ってくれば、十分自己治癒力が機能し、ちょっとした揺らぎが立て直されればいいのだと思います。



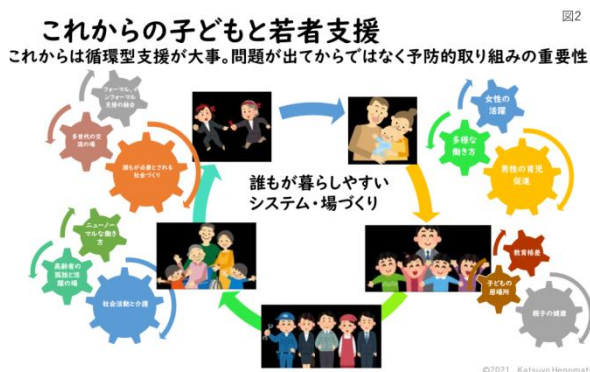


### 3. 横浜メンタルサービスネットワークはどこに向かうのか？

ハタチを迎えた YMSN はどこに向かうといいでしょうか？ ぜひ読者の皆様からのご意見もいただきたいです。2020年 YMSN は小さなうちにお引越しました。そこを拠点にどんなことができるか想像が膨らみます。活動のキーワードは「循環」。もう誰を支援する、どんな人をターゲットにする時代ではなく、「みんな」が集える場を作り、そこから相互に支援や助け合いが起こる循環を作っていく場を作ることが必要だと思っています。何かしたいと思っている高齢



者が子どもたちを支える、支援の対象だった障がい者が、子どもや高齢者を助ける、在宅ワークの合間にボランティアをする… など私のワクワクは止まりません。「みんなの家」になるといいなあと思っています。(図2) 私の息子は YMSN の事務所が大好きで、「小さなうち」に行こうよと言います。「小さなみんなのうち」にぜひ皆さんもいらしてください。そして皆さんの声を聞かせていただける日がもうすぐきますよ～



## 認定NPO法人多文化共生教育ネットワーク (ME-net)の取り組み

～外国にルーツをもつ、今、目の前の子どもたちの支援を続けて～

### はじめに

6月30日(水)「認定NPO法人多文化共生教育ネットワーク」(以下、(ME-netと略す)の理事である高橋清樹氏に話を伺った。場所はウィリング横浜。

「ME-net」は「外国につながる子どもたちの教育を支援し、共にいきられる社会の実現を目指します」という目的を掲げ、「彼らが日本社会で育つ中で制度や環境の違いによって不利益を被ることのないよう社会の課題を明確にし、その解決をめざすべく多角的に事業を展開しています」(ホームページより)という活動を行っている団体である。

ME-netの高橋氏とは、YMSNの若者支援の関連でこれまで外国にルーツをもつ若者の個別の問題で協力をいただき、相談・連携しながら対応してきた経過がある。今後も必要不可欠な関係機関のパートナーとしてご協力いただくとと思われる。

### ME-netの活動のきっかけ

1995年当時、現役の教師であり、大和難民定住センターのボランティアや地域日本語教室の代表でもあった高橋氏は外国にルーツを持つ子どもたち(ベトナム難民、中国残留孤児2世や南米移民の2世等)に出会い、高校に行けないという問題に直面した。最初はベトナムにルーツのある子たちで日本語が出来ないので定時制高校で学びたいという希望をもっている子が何人か来た。そして同じような希望をもっている子どもたちが多いことが分かった。そこで、高校に行くための説明会をやろうということになった。一番取り残されるのは親。また親にきちんと説明して納得してもらわなければ進学できない。日本では高校を卒業しないと就職が難しいという社会状況も親に理解してもらう必要があることから**親と子の進学説明会(ガイダンス)**を行ったのである。この時日本語教育教員、通訳のボランティア、高校の教員・地域で支援活動をしている人達約20名が関わり取り組んだ(日本語を



よく話せない親もいるため通訳の協力も不可欠。通訳の方も自分の時間を削り無償でしてくれた)。

このことがきっかけとなり、任意団体として活動を開始した。

その後2011年にNPO法人となり、2019年にはME-netは認定NPO法人も取得した。活動は26年継続している。会員は現在120名くらいいる。会員で教員をしている人の中には大学教員も多い(大学に多文化関連の学部が増えたり、大学で日本語教育に関わる人も増えているためという)。

### 主な活動

#### 1 外国に繋がる子どもへの教育・進路サポート事業

活動のきっかけとなった高校進学ガイダンスは毎年行っている。

高校卒業後の進路支援、高校を出た後のサポートも行う。この支援では先輩から卒業後どのように進路を選択したか、どういったことで困ったのかなどの体験談を直に話してもらっている。具体的に身近な話を聞く人がなく、体験を聞く場がないのでこの体験談は重要である。外国にルーツを持つ子どもたちは進路選択する材料が少なすぎる。体験談に影響されすぐに「私も…」と同じような選択をする子もいるが自分の体験ではないので長続きしない場合も多い。できるだけ違う体験を聞く機会を重ねていく必要がある。

高校・大学に入り日本語や母語もでき資格を取って卒業後会社に入る子もいる。しかし、目に見えない差別や文化の違いから来る無理解などにあい会社をや

め、結局他に働く場所がなく、コンビニ弁当を作る工場や夜勤までして働くことになったりする。このような工場やコンビニで働く外国にルーツを持つ子どもたちはかなり多いという。

### 2 多文化教育コーディネーター派遣事業

この事業は2007年から開始した。2006年からの「かながわボランティア活動推進基金 21」（以下基金と略す）を受けて行われている。具体的には、外国にルーツを持つ子どもが多く通う高校（神奈川県立・横浜市立・川崎市立高校等）に支援員を派遣する。支援員は多文化教育コーディネーターとして学校とやり取りや会議をし、何が必要なかを明らかにし支援する。そして、日本語教育が必要であれば、日本語の先生を、通訳が必要であれば通訳をコーディネーターが探すところまで行うという。学校を巻き込みながら、学校の中での体制づくりを行っているのである。最初4校から始まり、現在は25校にまで広がっているという。基金終了後は教育委員会と直に協定書をかわして継続している。教育委員会との協働事業となっている。

多文化教育コーディネーターを担う人は、地域で活動していて地域のリソースを知っている人、（そうすると場合によっては家族の相談にも乗りサポートもすることができる）、その他県民活動サポートセンターなどで日本語教室をやっている人、さがみはら国際交流ラウンジや横浜市国際交流ラウンジなどでの窓口で相談員をしていた人などである。

### 3 かながわ外国人教育相談事業

活動の大きな柱として2003年より外国人教育相談を開始している。事務所のある「神奈川県立地球市民かながわプラザ」（略称アースプラザ）では、月・水・金週3回行っている。

その他外部の様々な団体と連携して取り組んでいる。横浜市の公益財団法人横浜国際交流協会（みなとみらい）で行われる教育相談にも入っており、土曜日に月2回担当している。

また、浦舟複合福祉施設内の南区のラウンジで月1回相談を行っているという。

相談件数としては、年間200件くらいとのことだが、内容的にはかなり重い相談が多いという。

「家を飛び出しちゃった」「勉強がわからない」な

どに始まり「学費が払えず学校をやめなければならない」とか「在留資格」の問題など横浜弁護士会と組んで対応する相談もある。2か月に1回は横浜弁護士会と会議ももっている。在留資格の事は変更するのに準備が必要なため教育委員会とからみながら関わっている、学校も関わってもらわないと困るので学校内で相談会をやっている。

### 新しく取り組み始めた事業

「WAM NET（ワムネット）」（独立行政法人福祉医療機構）ではこれまで積み重ねてきた相談や、学校との連携・地域との連携し人を派遣するような子どもを支援するセンターを作りたいと「WAM NET」に要望し、採択された（外国籍の大人のためにはワンストップで対応するものを作る計画はあるが、それは子どもが使えないわけではない）。現在助成金を受け相談と地域や学校連携したモデル事業を開始している。公益財団法人よこはまユースと連携してやっているが新型コロナ感染の影響のため「アースプラザ」にある事務所では分散型で行っている。

この事業では政策として必要だということを行政側に訴えるため、課題を「見える化」することを目的としている。併せて神奈川県国際課にも要望している。神奈川県は観光がつく国際課なので、多文化共生の課題や政策作りを専門にしていない。愛知県や静岡県では多文化共生課を設けて多文化共生社会の実現に向けて指針作りや政策作りに取り組んでいる。

最近では国からのアクセスが増え、やり取りが増えている。文部科学省とは国際教育局ができたので、そちらとやりとりしている。また、法務省とは横浜入管管理局の相談窓口と、そして厚生労働省とは外国雇用相談窓口の担当者とやりとりしている。

厚生労働省は、外国人の子どもの将来の問題にあまり向け合っていない。教育・就労に向けての課題をやっと取り上げてくれた。国は日本の少子化で労働力が不足し、外国人材総合政策プラン立てた。労働力が不足している分野に特定技能の人を30万人受け入れて働いてもらうための計画を進めていた。しかし、新型コロナ感染の影響のため、実際には6千人しか日本に来られていない。そこでどうしたらよいかと複数

の部署にまたがって会議をしたら、子どもの日本語や教育の課題がでてきた。今いる子どもたちをどうするか？待ったなしの課題である。文部科学省からも①高校の進学率が低い ②入学しても中退率が高い ③高校卒業後正規雇用率が低いというデータがでてきたのである。これは問題ということで厚労省に波及し、さらに法務省に波及していった。ようやく課題が見える化してきたのである。

最後に、高橋氏は「外国にルーツを持つ子どもたちに教育投資を行うことは、すぐに結果はでない。しかし、日本は国際的視野が乏しく国際競争力が低下しているといわれている今、長い目で見れば、多様性や多文化の享受により日本社会の国際化が推進され、彼らから学ぶべきことは多い。

子ども時代から日本語もわからずいじめられたり、辛い思いをしている彼らは、苦勞している分だけ乗り越える力も強い、挫折して這い上がる力も強い(ドロップアウトする子どもも多いが、セイフティネットを支えるようにしている)。そして20代30代になると社会貢献の気持ち、社会のために役に立ちたいと強く考えている子も多い。彼らに早くから支援することで

ドロップアウトする子どもも少なくなると思うし、何より国際化の視野を彼らから学べる」と話された。

なお ME-net は対象としている方たちの状況から受益者負担が非常に難しいので、「趣旨にご賛同いただける方に寄付をお願いしています。ご協力いただくと幸いです」ということでした。

#### 終わりに

ME-net の活動を伺い、外国にルーツのある子どもの在留資格や進学・就職等の重く複雑な問題に対し、丁寧に関わり関係機関のネットワークを武器に解決を目指している姿勢に頭が下がる思いであった。少子化が止まらない日本、不足している部分だけ外国人労働者を頼りに受け入れる。一方で彼らに家族がないかのような扱いをしている現実。一番しわ寄せをくうのは子どもであること。また、難民の受け入れの貧弱さ。私たちは今ここで暮らす生活者としての彼らに、もっと理解と支援の手を差し伸べる必要があると思われた。

(YMSN 森川充子)



## アート制作を活動の柱にした就労継続 B 型事業所「道工房」

～ 鎌倉駅近くのギャラリーも人気 ～

### はじめに

アート制作が活動の柱で、精神障がい者が生き生き働く事業所があることを知り、見学・お話を聞かせていただきました。NPO 法人「道」は、精神障がい者の作業所として 2002 年に開設されました。その後、障害者自立支援法の施行により 2012 年より地域活動支援センターと就労継続 B 型事業所「道工房」に移行し、目的を「アートで就労」と掲げたとのこと。

アートの始まりは、作業所「倶楽部”道”」の運営時に電通でクリエイティブディレクターとして活躍されたボランティアのプログラム「パステル画サロン」の中で、利用者のアート作品を何とか生かせないかという思いもあり、就労継続 B 型事業所「道工房」が誕生したそうです。

### 活動の様子



制作中の様子



商店会のぼんぼり制作

訪問した日、作業場では 7 人のアーティストさんが作品に向かっていました。その日は大きなキャンバスに絵を描くプログラムでした。画材はパステル、水彩、アクリル、油彩、ペン、色鉛筆などの中から、それぞれが好きなものを使い製作していました。細かい線画だったり、パステルと水彩を組み合わせたり、どの作品も味わいのある本格的なアート作品でした。

それぞれに素質を持っているアーティストさんたちですが、美大出身のスタッフが彼らの相談役としてそばで、「こんなことが出来るよ」「この技法を追加してみると変化が出そう」などのアドバイスしてくれたり、スタッフが持つ技法を教えてくれたり、その中で

アーティストさんのスキルがアップするという効果があるようです。

日本画を学んできたチームマネージャーの吉澤葵さんは、みんなの作品を丁寧に世に送り出しています。日本画と聞くと素人の私にはとてもハードルが高く感じましたが、トライしているアーティストさんも何人かいて、作品はどれも素敵でした。「この江ノ電のある風景画を江ノ島電鉄のグッズとして認定してもらえよう、申請中なんです」と教えてくれました。

「道工房」は鎌倉美術連盟に所属しています。作品は、レンタルアートとして、またはギャラリーへ展示されます。その中でもお客さんのリクエストがあれば、デザイン製作品としてブローチやキーホルダー、トートバッグ、クリアファイル、和紙ポストカードやカレンダーなどとして製品化しています。なかでも大仏の顔が描かれた大仏ブローチは、雑誌「オレンジページ」に掲載され、修学旅行客に大人気だそうです。製作者のアーティストさんは「まぐれです。まぐれ!!」と照れながらもうれしそうにお話しされていました。「よく似てらっしゃいますね」というと、「よく言われます」と・・・。

黙々と作品を作られる方の中でお話を聞かせていただきました「将来の夢は、何かありますか？」に対して「ここでずっと作品を作り続けることです」と聞き、生涯の職場である「道工房」が輝いてみえました。

### 鎌倉・小町商店街の一員として

「道工房が活動していく中で、商店会、ボランティアの存在は大きくて…」と理事長の岩立実勇さんは説明してくださいました。「毎年商店会のぼんぼり祭りのぼんぼり制作を任せてくれたり、絵画レンタルを利用してくれたり、作品を購入する方もいるなど、つながりがとても温かい地域です。そんな縁からかビルのオーナーがギャラリーを貸してくれることになり、2019 年 7 月、「道ギャラリー」をオープンしました」



## 道ギャラリー



グッズ販売コーナー



道ギャラリー「blue展」



ギャラリーには、修学旅行の学生や観光客が多く立ち寄ってくれ、グッズの販売もしています。コロナ禍で、観光客が減った影響はあるようですが、「投げ銭コーナー」（＝好きな作品にコインを寄付する）を設けていると、学生さんがそこにお金を入れてくれることがあり、うれしくなりました。という話を聞きました。またそのビルの2階の廊下部分にも絵画を飾らせてもらえて、そこで絵を気に入って購入してくれる方もいらっしやったそうです。

アーティストさんたちの活動は、作品制作のほかに、高齢者施設や子どもたちを集めての「出張アート教室」などもあります。また、展覧会に出品し多くの受賞をしています。

### 特徴的なこと…

道工房の特徴は、アートが作業種目であること。また、スタッフ7人中5人が、美術大学出身者であることです。専攻は、日本画、パッケージデザイン、動画制作、絵本作家など。

美大出身者が福祉に… を驚く私に、吉澤さんは、「“福祉とアート”の求人の魅力を感じ、見学してまた魅力を感じたので、この職に就きました」と話されました。理事長の岩立さんは、「アートは良いところに魅力を感じて豊かになっていくもの、福祉も良いところを見て、豊かにしていくもの。そこがピッタリはまるんですね。今では求人を美大に出すことが多いです」と話されました。

道工房は、アートをコミュニケーション・ツールとして社会と関わることを軸に「明るく・楽しく・美しく」をモットーに自由に独創性ある作品を描いていま

す。とパンフレットに記されています。アートをコミュニケーション・ツールとした実践は、これから先の企画がわき上がっているようで、絵本作り、紙芝居づくりをしつつ、子どもたちとのコミュニケーションをしていきたいという企画が目前にあるようです。

### 終わりに





新しい形の職場に出会いました。またコミュニケーションのあり方も私自身の考え方が膨らみました。地域には、魅力的な実践がたくさんあることを久しぶりに外の取材に出かけて感動しました。どうぞ皆様出かけて見てください。きっと豊かな何かを得られますよ…

(YMSN 鈴木弘美)

就労継続B型事業所「道工房」

ホームページ <http://kamakura-michi.com/>

鎌倉市小町2-12-37 小町ティアイビルII2A

-  絵画レンタル
-  オリジナルアートグッズ
-  パンフレット・チラシ・名刺のデザイン制作
-  出張アート教室

## 立つ鳥、後を濁さないための5年間／第2期がスタート

片柳 光昭（みやぎ心のケアセンターセンター）

令和 3(2021)年度が始まり、3 カ月が過ぎた。所属先のみやぎ心のケアセンターは、令和 7(2025)年度まで延長して運営されることが決まり、当職もこれまでと変わらず気仙沼地域センターでの業務が続いている。

延長された5年間は「みやぎ心のケアセンター第二期」と呼ばれている。その主な任務は、現在実施しているいくつもの事業を少しずつ縮小させながら、当センターの終了に向けて軟着陸させることである。地域の関係機関の方々、住民の方々にできる限り迷惑をかけない形で、いかに円滑に事業を終え、姿を消していくのが求められている。何事にも言えることだと思うが、始めること、広げることは容易いが、小さくすること、終えることには大きな苦勞と困難が伴う。まさに、後を濁さないで立つことが我々の目指す姿である。

思い起こせば、当センターが設置されたのは東日本大震災から約1年後の平成 24(2012)年 4 月であった。当時はまだまだ混乱が続いている状況にあり、当センターは、自治体の保健師をはじめ、地域の支援者との信頼関係をつくることから活動を開始した。その後、少しずつ支援者からのご依頼に応じて、住民への訪問活動をおこなったり、集会場にお伺いしてお茶会に交えていただいたりするなどが、できることの精一杯だった。それらを1日、1カ月、1年と続けることで、今日、どうにか地域に受け入れて頂くところまで来たように感じる。我々に課せられた、被災した方々の心のケアについて、始めて、広げていくことに全力を注いできた時間であった。

ここからは、力を注ぐ方向が180度変わるようになる。当職自身、これまでに自分が所属している組織が終了するという経験はなく、大げさに言えば、未知なる領域である。ましてや、そのかじ取りをする役職を

担っていることを踏まえると、その責任は途轍もなく重い。今後の進め方によっては、これまでスタッフと一緒に頑張って積み上げてきたものも、「心のケアセンターって、最後の5年間はガッカリだったよね」と言われて終わるかもしれない。我々のような外部の組織にとって、その地域に受け入れてもらえないことほど辛く苦しいことはない。当センターが運営を開始した当初、我々の力不足から地域の方々のお役に立てなかった時期があった。そのような時間は二度と過ごしたくないのだ。だからこそ、この地域の方々にとって最善の形で当センターを終えていくことが何より重要であると考えている。しかしながら、今のところ、その形についてはイメージも掴めていない。一方で、これまで通り、地域の方々との意思疎通を大切にしながら丁寧に取り組んでいければ、自ずと見えてくるのではないかとの思いもある。

いずれにしても、貴重な残り時間である。そして、今後、当センターがどのような経過を経て、役割を終えていくのか、皆様にはこのような機会を通じて、見届けていただけたら幸いである。

### 【追伸】

気仙沼が舞台である、NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」を見ていただいていますか。当センターでは、お昼休みを利用してスタッフみんなで見ています。地元のスタッフは、モニターの映像を見ながら「ここって、〇〇（地名）から坂を下ったところだよね!」とか、「知り合いがエキストラで出ているんだって、どれどれ…」など、撮影地ならではの楽しみ方で盛り上がっています。

## カフェ

3月のオープンから5カ月、プレジョブ生やスタッフがチラシを配ったり、駄菓子屋へ来る子どもたちが親へ伝えてくれたりと、少しずつですが地域の方に周知されてきました。そのおかげで近くの団地に住む方がパンを買いに来たり、コーヒーを飲みに来てくれます。子どもから話を聞いたと、小さなお子さんを連れてお母さん連れも来てくれるようになり、カフェでは皆さんゆっくり過ごされています。メニューは「ホットコーヒー、紅茶」のみの予定でしたが、皆さん急坂を登って来られるので「アイスコーヒー」を希望される方が多く、急きょ5月からメニューに加えました。またプレジョブの2年生が4月からカフェで実習を行っており、オープン前準備や清掃、接客をしています。7月から週1度、オープン前から12時閉店・片付けまで1人でチャレンジしています！最初は声も小さく、顔もうつむきがちでしたが、3カ月間で時間を見ながら仕事を進めている姿やチャレンジする気持ちが持てたこと、スタッフ一同とても嬉しく思っていると同時に、実習をすることの意義を改めて再確認することが出来ました。(YMSN 吉成広美)

## 駄菓子屋

駄菓子屋では、最近、小学5年生の男の子や女の子達が毎日のように遊びに来て、駄菓子を食べながら、ウッドデッキでUNOやトランプ、将棋を楽しんでくれています。小学5年生の男の子の一人は、通っている小学校で駄菓子屋カフェロドリのことをクラスの友達にいつも話しているから、クラスの子達はみんな、駄菓子屋カフェのことを知ってるよと教えてくれました。いつも遊びに来てくれている子ども達が学校でも駄菓子屋カフェの話をしてくれていると思うとうれしくなります。



他にも小学3年の女の子達も駄菓子を買いに来てくれました。畑の野菜に興味を持ってきて、キュウリやナスの収穫をしたいと言ってくれたので、一緒にちょうど良い大きさになったキュウリの収穫を行いました。女の子達はとても嬉しそうにキュウリを収穫していました。

別の日には、収穫したキュウリを切って、小学生達に食べてもらいました。子ども達はすごく喜んでくれました。「キュウリ、おいしい」と言って残さず食べてくれました。

その他にもウッドデッキで緑を見ながら勉強したいという男の子の兄弟も来てくれて、机で一生懸命勉強したり、駄菓子を食べて休憩したり、息抜きをしてくれています。

そして、いつも駄菓子を買いに来てくれる小学生達が駄菓子屋カフェに来たことのないお友達を誘って遊びにきてくれて、だんだんとお客さんが増えていっています。お店が賑やかになってきて、とてもうれしいです。

ウッドデッキでお友達と駄菓子を食べながら、ゲームをしている小学生達はリラックスしていて笑顔も多く、とても楽しそうです。閉店の時間まで、ワイワイとゲームを楽しんでいます。駄菓子屋カフェロドリが小学生達の憩いの場になっていて、とてもうれしく思います。

みんな、元気でいい子ばかりです。これからも駄菓子屋カフェロドリがみんなの交流の場になってくれるとうれしいなあと思います。(YMSN 原悦子)

## ジョブコーチ

昨年3月に高校を卒業し、4月から働き始めたTさんの支援が終わろうとしています。

コロナ禍でも会社は通常通り動いていたので、Tさんも休まず勤務していました。倉庫内・外での作業なので体力的にも厳しい環境ではありますが、自身で体調管理を行いながら取り組んでいます。この1年間に職場の協力もあり、2つ資格を取ることが出来ました。普段から感情が出ない方ですが、フォークリフトの資格が取れた時の笑顔は忘れられません。

1年前の入社時に比べ、体つきも1回り大きくなり、腕なども筋肉質になるなど立派になっています。障害に理解ある職場・職員の方が多いので、これからは仕事の楽しさや向上心が持てるようになるといいなと思っており、本人や職場上司にも伝えつつフェードアウトしていきたいと思います。

(YMSN 吉成広美)

## プレジョブ

新年度のプレジョブは1年生8名、2年生5名でスタートしました。

新型コロナウイルス感染症予防で三密を避けるため、午前午後でプログラムを入れ替え制にしたり、1・2年生同時にプログラムを行う日はどちらかが外出するようにしています。お互いに交流する機会は少ないのですが、5月には2年生がウェルカムパーティーを企画してくれました。優しい先輩とトランプやUNOのゲームをして、1年生の緊張も少しほぐれてきました。

1年生はそれぞれの体調と目的に合わせて週1日～週4日通うことから始めています。蒸し暑い季節になり階段を登って来るだけでも大変です。ゆっくりと慣れてもらいたいと思います。

2年生は座学のプログラムに加えて、カフェの実習、畑仕事、団地のセブンカーお手伝い、ととても頑張ってきました。自信が付いてきたところですが、そろそろ半年後の卒業を意識し始めて気持ちはモヤモヤしています。

Aさんは、前に進みたいけれど過去に学校に行けなくなった経験がブレーキをかけています。そこで将来のことを考える前に、気持ちを整理する時間を持つことにしました。Bさんは、1年かけて日数を増やし週4日朝から通えていましたが、最近疲れが出て来ました。「やりたい気持ち」と「体力」のバランスを取るのには難しい課題です。Bさんだけでなく、長く働く中で誰もが一度はぶつかる壁かもしれません。不調の時は休んだりペースを落としたり、プレジョブ期間に自分のペースを掴めるように応援していきます。(YMSN 山口奈保)



## Irodori

最近の Irodori は、新しく高校生の女の子がメンバーになってくれました。その女の子は生き物が好きなので、いつも事務所の庭にやってくるキジバトやシジュウカラなどの観察を一緒に楽しんでいます。鳥のエサをあげて、食べに来るのを待っている間、鳥の生態について教えてもらったりしています。事務所の庭によく、キジバトが来てくれるのですが、公園にいるドバトとは模様も鳴き声も違い、キジバトは茶色くオレンジの模様があつてきれいなんだよと教えてくれました。とっても優しい女の子です。

その他、6月の Irodori の昼食会は、ハンバーガーを作りました。たくさんのひき肉と玉ねぎで大きなハンバーグをつくり、トマトやレタス、チーズを挟みました。フライドポテトも添えました。

自分のハンバーガーは自分で具材を挟んでみようということで、みんな、それぞれで具材を挟み、楽しみました。



バンズの上に具材を乗せていくのですが、みんな上手に具材をのせて完成させていて、まるでお店で出てくるような豪華なハンバーガーだねと言って、美味しくいただくことができました。食後のゲームは、久しぶりに Irodori のオリジナルかるたをやりました。初めてやる子もいたのですが、みんな、札をとるのが素速かったです。みんなでやるかるたは、とても楽しかったです。（YMSN 原悦子）

## 事務局より

### 寄付を頂いた方

税)エクラコンサルティング、武井昭代、谷 守、松本まさみ、佐倉洋、宮崎祥司、岳瀬真理子、金山正恵、中島契恵子、鈴木弘美、(以上、敬称略)

### 会費を頂いた方

佐藤幸江、神奈川ゆめ社会福祉財団(賛助)、渡辺和美、佐藤不二代、菅谷幸彦、松本まさみ、山本かなめ、小松裕史、大平道子、山本圭子、加瀬昭彦、吉野裕、久間久恵、石川到覚、NPO 海の会(賛助)、武井昭代、蜂須賀益徳、羽鳥乃路、堀江有里、佐倉洋、森川充子、鈴木弘美、櫻井廣知、長嶋悦子、桐原重孝、岳瀬真理子、宮崎全代、金山正恵、山口奈保、原悦子、中島契恵子、松本まさみ、佐倉洋 (以上、敬称略)

ありがとうございました。

## 定例研修会

- ・精神保健福祉研修会
  - ・日程 毎月 第2金曜日 (全10回)
  - ・時間 pm. 7:00~8:30 (8月はお休み)
  - ・場所 ウィリング横浜研修室 (上大岡駅 徒歩2分)
  - ・内容 ひきこもり(詳細はHPで)
  - ・ホームページをご覧ください <http://forest-1.com/ymsn/>

## 当事者のためのグループ活動

- ・就労フォローアップミーティング
  - ・年1回、OB会の開催
- ・就労者SST
  - ・日程 毎月 第1土曜日 時間 pm. 1:00~2:30
  - ・場所 YMSN研修室
- ・当事者グループ活動

## 駄菓子屋カフェIrodoriイベント

### 「本の会」のご案内

- ・日程 毎月第2土曜日 (土)
- ・第一部 11時30分~12時 赤ちゃんから保育園生
- ・第二部 13時30分~14時 保育園生から小学校低学年
- ・会場 駄菓子屋カフェIrodori デッキスペース

正会員：5,000円(個人) 賛助会員：12,000円(団体)  
(正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付)  
振込先：郵便振替口座 00250-6-71607  
横浜メンタルサービスネットワーク

会費を銀行・コンビニATMやネットから振り込む場合の入力方法をご案内します。

振り込み料は432円かかりますが、郵便局に行かなくても良いので楽は楽です。

(金融機関名) ゆうちょ銀行 (店名) 〇二九  
(種別) 当座 (口座番号) 71607  
(名義) ヨコハマメンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol. 18 No. 1  
YMSN 第69号 2021年7月10日発行

年間購読料1,000円(年4回発行) 1冊頒価300円

発行：NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク  
理事長 鈴木弘美 編集代表 森川充子  
〒234-0052 横浜市港南区笹下 1-7-6  
TEL 045-841-2179  
FAX 045-841-2189  
<http://forest-1.com/ymsn/>  
e-mail : [ymsn@forest-1.com](mailto:ymsn@forest-1.com)